

ユストゥス・リプシウス

山内 進

(一橋大学長、EUSI 元 Advisory Board)

ベルギーの首都ブリュッセルには、EU の中心的機関が多数ある。欧州委員会や欧州議会、欧州連合理事会（閣僚理事会）の建物がある地区は EU 地区と呼ばれるほどである。その EU 地区になかには欧州連合理事会のモダンな建物がある。この建物は 1995 年に竣工しているが、拡大する EU の機運のなかにあつてか、かなり広大で、EU の殷賑ぶりをよく示している。

さて、この建物には名前がついている。「ユストゥス・リプシウス・ビルディング」という。ユストゥス・リプシウスというのは人名で、建物のこの名称は、前の通りが「ユストゥス・リプシウス通り」とされていたことに由来する。欧州連合理事会が以前に入っていた建物の名は「シャルルマーニュ」だった。「シャルルマーニュ」はフランク帝国の創始者カール大帝のことであろうから、いかに通りの名前に由来するとはいえ、ユストゥス・リプシウスもそれ相応の人物であろうということは推察される。とはいえ、そんな名前は聞いたことがない。何者だろう。そう思う人も多いのではないだろうか。

リプシウス(1547－1606 年)はベルギーのルーヴアン近郊の町に生まれ、ルーヴアン大学で学び、後にレイデン大学等の教授として活躍した偉大な古典学者で、エラスムスの次世代の代表的人文主義者である。エラスムスがオランダの全ヨーロッパ的知性とするなら、リプシウスはベルギーの全ヨーロッパ的学識である。ベルギーの誇る知的巨人であり、その意味で、ユストゥス・リプシウスは、ベルギーにとっても、ヨーロッパの統合を目指す EU にとっても、欧州連合理事会が拠点とする建物の名にふさわしい、といえる。

私は、日本ではほとんど名前を知られていないこの人物について、近世ヨーロッパではきわめて著名な人物であった、ということ EU について語る場合の基礎知識として次に簡単に紹介しておきたい。

彼が著名であったということについては、ピーター・ゲイという歴史家によって実に巧みな表現されている。ゲイによれば、18 世紀においてすら、リプシウスは「グロティウスよりもはるかに強い支配力を文化に対して行使」していた。「1606 年にリプシウスが死ぬまでに、彼のストア主義的な論稿『恒心論』は、ラテン語で二四版、七カ国語に及ぶ近代語訳を出版した。タキトゥスへの回帰のきっかけとなった・・・『政治学(6 巻)』と彼の死後に公刊されたストア哲学入門は非常に多くの読者を得た。リプシウスの著作は、150 年間にわたって、ベーコンあるいはボダンのそれよりもっと売れた。おそらく彼はモンテーニュよりもさらに有名だった。ギボン、リプシウスの『鮮やかさ』を好んだ。モンテスキューは、リプシウスの改版になるタキトゥス、『恒心論』、『政治学(6 巻)』、その他の著作に依拠した。ヴォルテールは、リプシウスのポリュビオス註解をフェルネーにもっていた。ディドロは『クラウディウスとネロ』をリプシウスの校訂によるセネカに基づいて記した。さらに、ドイツ啓蒙主義の父マジウスやヴォルフといった大学の哲学者たちは、彼らの学生にリプシウスを読むように薦めた」(Peter Gay, *Enlightenment*, New York, 1975, p.300)。

リプシウスの『恒心論』の初版(ラテン語版)はオランダのレイデンで 1584 年に出版されたが、同年のうちにオランダ語訳とフランス語訳が出されている。このオランダ語訳はアントウェルペンの出版業者プランタンから出されて

いた。プランタンはクリストフ・プランタンの工房を起源とするが、女婿モレトゥスによって引き継がれ、19世紀半ばまで近代的出版社として活動し続けた。『恒心論』のオランダ語の訳者はこのモレトゥスであり、現在もその工房はプランタン・モレトゥス博物館として存在し、2005年には世界遺産に登録されている。結局、『恒心論』は19世紀半ばにいたるまで、ラテン語のほかに、オランダ語、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ポーランド語訳で総数70を優に超える版が出された。

もう一つの主著『政治学6巻』は1589年にレイデンでラテン語の初版が出されてから、ラテン語版のほかにオランダ語訳、フランス語訳、英語訳、ポーランド語訳、ドイツ語訳、スペイン語訳、イタリア語訳、ハンガリー語訳が出され、90を超える版が出されている。とくに、ナントの勅令を出したことで有名なアンリ四世(1553-1610年)下のフランスで10版に及ぶフランス語訳が出されていることは注目される。アンリ四世自身がリプシウスを評価していたのはいままでもないが、新ストア主義を多かれ少なかれ受け入れていた彼の高官たちのなかにシュリー公(1560-1641年)がいたからである。シュリー公こそ、アンリ四世の片腕でフランスの財政再建に尽くし、欧州連合の先駆的構想といわれる「アンリ四世の大計画」を記した人物にほかならなかった。

さらに・・・と話を続けることは字数の関係でできないが、あとひとつだけわかりやすい話をあげておくと、リプシウスを尊敬した人物のなかに、ペーテル・パウル・ルーベンス(1577-1640年)がいたということは指摘しておきたい。彼は「リプシウスとその弟子たち」という有名な絵を残しているが、その弟子たちのなかに彼自身を描き出しているからである。リプシウスはルーベンスの絵の思想的バックグラウンドをなしていた。

残念ながら、日本の思想史学界にはかたよりのあるらしく、これだけの人物にふれた著作はほとんどない。したがって、EUの「ユストゥス・リプシウス・ビルディング」といわれても、日本人にはまったくイメージがわからない。それではいけないと考えて、私はこの稿を記した。

しかし、記したのには、実はもうひとつ理由がある。それは、このリプシウスこそ、私が博士課程の時代に研究し、私の博士論文のテーマにした思想家だった、ということである。私の学位論文の題目は『新ストア主義の国家哲学—ユストゥス・リプシウスと初期近代ヨーロッパ』(千倉書房、1985年)という。これは、後にも先にも、日本における唯一のリプシウスに関する研究書である。だから、私は「ユストゥス・リプシウス・ビルディング」の名をはじめて目にしたとき、驚きかつ感動した。私はEUの研究者ではない。専門はヨーロッパ法制史である。だが、その瞬間、リプシウスとEUがつながっているように、私もEUとつながったような気がした。爾来、私はこのつながりを大切にしている。